

## 第1回 宇都宮市学校問題検討会議 会議録

■ 日 時 平成20年2月21日(木) 午後4時00分～5時45分

■ 会 場 教育委員室(本庁舎13階)

■ 出席者

会議委員：太田周委員，原田いづみ委員，片山辰郎委員，小林真理子委員，  
北村光弘委員，五味田謙一委員

事務局：教育長，教育次長，教育次長(学校担当)，中学校長会代表，  
小学校長会代表，教育企画課長，総務担当主幹，学校教育課長，  
学校健康課長，教育センター所長，教育企画課長補佐，総務担当副主幹，  
学校教育課長補佐，教育企画課管理係長，学校教育課教職員係長 ほか

■ 傍聴者 5名(報道関係者のみ)

■ 会議経過

1 開会

2 教育長あいさつ

3 委員・事務局紹介

4 議題

(1) 会長・副会長の選出について

互選により太田委員を会長に，北村委員を副会長に選出

(2) 会議の公開について

本会議は原則公開とするが，児童・生徒へのセクハラ事件や体罰事件など，被害児童生徒の人権・プライバシーに係る事案については，個人情報保護や教育的配慮から，その都度，本会議での判断とする。

なお，本日の会議の議題(4)「不祥事が発生する原因・背景，傾向，問題点について」の中で，個別の不祥事の発生状況の説明及び質疑については，当該児童・生徒の個人の権利利益を害するおそれがあることから，宇都宮市情報公開条例第7条第2号の規定により，非公開とする。

(3) 学校問題に係る対策方針の策定について

(4) 不祥事が発生する原因・背景，傾向，問題点について

5 その他

### <委員からの主な意見・質問等>

#### 4(3) 学校問題に係る対策方針の策定について

五味田委員：保護者のアンケートは，いつ頃，どのような視点で実施する予定なのか。

事務局：4月頃に実施を予定している。市内小中学校の児童・生徒数から統計学的に判断し，約500名の保護者を対象とする。アンケートの内容は，不祥事の再発防止や信頼される学校づくりに向けて，教職員に望むもの，学校や教育委員会に期待するものなどについて意見を聴く予定である。

#### 4(4) 不祥事が発生する原因・背景、傾向、問題点について

※ 個別の不祥事の発生状況の質疑応答については非公開

北村委員：教員の不祥事の発生件数が19年度は現在12名となっているが、全体の教員数はどのくらいなのか。また、一般の市職員の発生割合と比較するとどうなのか。

事務局：市内小中学校の教員数は約2,000人である。市職員の発生状況等のデータは用意していないので、次回の会議までに調べて報告する。

五味田委員：不祥事を起こした教員に対する分析の中で、普段の勤務成績や教科指導力がどうだったかという分析はされているのか。もしそのような資料があればお願いしたい。

事務局：現在のところ、そこまでの分析はしていない。

太田会長：五味田委員が言われたように、相関があるのかどうかは重要であり、ぜひ検証していただきたい。

小林委員：今回の検討会議で取り上げる不祥事の範囲というのは、あくまでも教師と児童・生徒の関係の部分だけなのか。それとも教師間の人間関係から発生するセクハラ・わいせつ問題等も含まれるのか。

事務局：教師間の問題等も含めて、様々な角度から、よりよい学校づくり・信頼される学校づくりに向けて検討していきたいと考えている。

太田会長：これから検討する場合、検討の場が単なる学校だけに限定するのではなく、教員の活動全体を含めて考えなければならないのではないかと。

北村委員：官庁組織は民間組織よりもかなり大きなものになっているが、日本の社会では、大きな組織ほど本音が言えない状況にある。上司によっては言える場合もあるが、日頃、懲戒処分等を受けた職員やその周りの職員の意見は反映されている（されていた）のだろうか。1人の子どもを育てるにも、かなりの意見の違いが出るものである。ぜひ、現場での本当の生の意見を取り入れていく必要がある。

太田会長：校長・副校長・それ以外の様々な教員といった組織体制の中で、相談や問題解決について話し合える体制づくりといった、新しい職場環境を作っていくという視点で考える必要がある。

北村委員：私ども民間企業では、社員教育には常に力を入れ、真剣に取り組んでいるが、20年ぐらい前から、豊かさが原因だと思うが、社会全体に「自分探し」、「自己実現の欲求」という現象が出てきた。いろいろな経験・挫折を味わった後の「自分探し」、「自己実現の欲求」ではなく、大半は現実離れた理想論が先走っており、教育も難しい時代に入ったと感じている。

太田会長：社会的な価値観の変化が進んでいる中で、教員の意識がどういう風にそれについていけるのか。非常に困難な場合には、それをどう解いていくかという

問題がある。今の子ども達は、我々の育った時代と違って自己主張が強くなっているのは事実である。また、保護者も自分たちの立場から学校に対して発言するといった外的なインプットを、教員個人がどうやって解いていくか。個人だけではなかなか解けないものが多い中で、解けるような環境をどうやって作っていくのかが、この会議での一番大切な検討課題である。

教育センターなどでも様々な活動をしていただいているが、それでも事故は起こってしまう。また管理者である校長や副校長の様々な問題によるストレスも多い中で、相対的にどう解いていくのか。制度の問題として解ける部分と運営の問題で解ける部分、そしてどうしても解けない部分がある。これは、人間が全能でないという側面を持っているためである。

小林委員：今日挙げられた事例は、ほんの氷山の一角であり、実際にはもっと多くの表立っていない不祥事があるのではと感じている。統計の取りようがないと思うが、実際に起きているであろう不祥事の件数と、それぞれの持つ学校風土との関連が知りたいと思っている。人間の心理の常として、管理体制の中で自由に振舞えず、上司の目を気にして日々過ごしていたり、申し立てができないなど、自分が汲々になって抑圧されている場合、欲求不満のはけ口がどうしても無意識に下の弱き人間（子ども達）にいつてしまう。逆に、学校風土がオープンで、何でも言っていていい、言ったから罰するのではなく、その問題を学校全体で考えていこうという風土があれば、子ども達には向かわずに、問題がオープンに議論される。個人の資質の問題は当然であるが、それをより予防的にするためには、学校風土としてオープンで、単に問題をダメだと捉えるのではなく、どう対応すればよかったのかという、次の段階に向けるような体制があると、抑圧されずに済むと思う。また、教職員の精神疾患患者数については、母数が2,000人なので、さほど多い数ではないように感じるが、実際に職種別に見ると、特に医療業や教職員は、他の職種に比べて、うつ病の罹患率が高くなっている。これは、学校業務に忙殺されることが直接の原因ではないかもしれないが、学校での人間関係などが大きな要因となっていることは確かなので、教員をうつ病に追い込む前に、何か救えるような体制づくりをしていかなければならないと思う。

太田会長：一人の人間として教員が生きていくという立場で言うと、子ども達すべてに良い条件を与えようと、どの教員もそう思っていると思う。そのような中で、一人の人間として超えられない何かを抱えてしまうということがある。管理するとルールを守るといった研修も必要であるが、臨床心理学といった心理学的な部分の研修、例えば自己分析能力を作るようなものにも取り組むべきではないのか。私の教え子の中にも教員になり、生徒と喧嘩をしてしまった者もいた。しかし、その個人を見てみると、非常に良いものを持っていて、成績も優秀であった。実際に教員という現場に出てみると、孤独であり、自分だけではどうしても解けない問題があると言っていた。教員だって人間である。オールマイティといった期待を持ちたいが、それはやはり無理があり、

自分だけでは解けない問題がかなりの領域に及んできているので、そういう面をサポートできるような研修を組んでもらいたい。

片山委員：大きな問題として3つ考えている。一つ目は個人の資質であるが、これは採用時の問題や研修内容の問題で、今後何らかの対策は立てられると思う。二つ目としては、学校というシステムの問題である。これは、文科省から教育委員会へ、そしてその流れが学校にきており、教員に課される任務が過重なため、先生と生徒との時間が希薄になり、ストレスを感じている。これも何らかの解決策はあるように思う。三つ目は、世の中の流れという、とても大きな問題であり、この場の議論でどうすることもできないが、昔に比べて教員の権限というものが無くなってきている。個人主義が発達し、明治以降の西洋に追いつけ追い越せの施策により、日本人の持っていた良いものを少し置いてきぼりにしてしまった結果でもある。現在の医療の現場でも、責め立てられ、昔に比べてかなりリスクが高くなっており、「きちんとして当たり前、何かあったら承知しない」という世界になっている。単に罰するのではなく、皆でよくしていこうという中で、危険度をゼロにしていく職場になっていければありがたいと思う。

五味田委員：意識調査の中にもあるように、教員という職業にやりがいや誇りを持っている、充実感や適応感が高いといった傾向にあるが、心を揺さぶるような、やりがいを感じられるような様々な取り組みを考えていく視点が必要である。教員は専門職であり、採用時は志を持って教員になられたと思う。そういうところをもう一度サポートできるようなことを、専門的な立場から委員の皆さんに意見を出してもらいたい。

太田会長：他の職種に比べて高い競争率を潜り抜け、誰もが希望に燃えて教員になっている。あえて教員という職を選んで挑戦するという状況の中で、それをどうやって育てるかといったことは、極めて重要なことである。

原田委員：セクハラの場合、主に上下関係の中で発生することが多い。教員同士の中で発生することもあるが、教員と子ども達という、いわゆる支配下にある中で、気が緩んだ時などに発生する。もちろん個人的な資質ということも当然あるが、職場のシステムづくりで十分に防止できるのではないか。不祥事の事例については、並列的・同列的に問題点などを挙げているが、もう少し原因ごとのカテゴリーがあって、その中で更にきめ細かな問題の分類をしていった方がよいのではないか。

太田会長：今回は概括的に全体を見渡し、問題点がどこにあるのかといったことを発掘していったが、次回の会議では、どういった対策をしていったらいいのかといったことが議論の中心になる。

## 5 その他

次回日程調整 平成20年3月18日(火) 午後4時から開催予定